

T. S. Eliot の未発表詩における夜明けの闇
—— *Inventions of the March Hare* ——

中 村 敦 志

1

T. S. Eliot (1888–1965)は20代の時、創作ノートとルーズリーフに、習作詩を書き溜めていた。この未発表詩が、*Inventions of the March Hare: Poems 1909–1917 by T. S. Eliot* (以後 *Inventions*) として、1996年に出版された¹。それまでは、なかなか見ることのできなかった貴重な詩篇である。未亡人 Valerie Eliot の許可を得て、ニューヨーク公立図書館で、この創作ノートを閲覧するしかなかったのである。しかもこの習作詩は、推敲途中のまま残され、その多くは手書き原稿である²。解読困難な個所があるため³、中には判読するのが難しい詩 (*hard to decipher*) も含まれていた (Ricks 65, 68)。だが、Eliot 研究者 Christopher Ricks の編集により、ようやく一般読者も目にするできるようになった訳である。Ricks は幾つかの判読例を注に記しながら、できるだけエリオットの創作意図に近い形に編集している。

この習作詩が書かれた1909年から1917年というのは、エリオットが21歳から29歳の時期にあたる。この9年間というのは、詩人エリオットの誕生を知る上で、重要な時期である。ハーバード大学の大学院で、哲学の研究を行っていた時期にあたる。その間パリに約1年間留学し(1910–1911)、1914年に今度はイギリスに留学している。翌年1915年にはイギリス人 Vivienne と結婚し、以後ロンドンに永住することになる。詩作に関しては、沈黙の5年間が含まれている期間でもある。1910年までの4年間に、10篇の詩を大学の同人誌 *Harvard Advocate* に発表しているものの、以後5年間はどこにも詩を発表していない。その沈黙を破るかのように、1915年にアメリカの詩誌 *Poetry* に“The Love Song of J. Alfred Prufrock”を発表し、詩壇にデビューする。その後2年間に雑誌に発表した詩をまとめ、処女詩集 *Prufrock and Other Observations* (以後 *Prufrock*) として発表したのが、1917年なのである。従って、創作ノートが書かれた期間というのは、アマチュア詩人エリオットがプロ詩人としてデビューするまでの習作期と言える⁴。

この習作詩は未発表であったため、これまで余り多くの研究は行われていない。最も初期の研究は、Lyndall Gordon による *Eliot's Early Years* (1977)に見られる。その後は、研究書の

中で部分的に触れているものが数点あるくらいである⁵。初めての本格的な研究としては、1989年のJohn Mayer著 *T. S. Eliot's Silent Voices* (以後 Mayer1)と、同じくMayerが1991年に発表した“*The Waste Land and Eliot's Poetry Notebook*” (以後 Mayer2)の2点が挙げられる。ただし以上の研究はすべて、*Inventions* (1996)が出版される以前に、ニューヨーク公立図書館所蔵の創作ノートを、個人的に判読して解釈したものである。しかもこの未発表詩の引用は許可されていなかったため⁶、我々読者は、上記の研究からエリオットの習作詩を漠然と推測するしかなかった。そして*Inventions* 出版後の状況だが、編集者Ricksが付けた膨大な注があるのみで、それ以外では書評が出ているくらいである⁷。*Inventions* (1996)のテキストに基づいた本格的な研究は、まだこれから始まろうとしている段階である。

本論は、以上のような状況を踏まえた上で、エリオットが書いた習作詩について考察して行く。その際、1つ注意しておきたいことがある。この習作詩は、はからずも *Inventions of the March Hare* と題されて出版されたものの⁸、生前エリオットが発表するつもりでなかった詩である。1922年にアメリカの弁護士でパトロンでもあったJohn Quinnにこの習作詩を贈った時⁹、エリオットは彼に宛てた手紙の中で、「決して印刷しないように」(*Letters*1, 572)と頼んでいる。未完成の段階であり、まだ発表するには不十分だとする判断がエリオットにはあった、と考えられる。従って、我々が*Inventions* を読む際には、エリオットの発表詩と比較することはあっても、決して同じ土俵の上で扱わないように注意する必要がある。

さて、*Inventions* には、同一あるいは類似した語句や表現そしてモチーフが、何度も繰り返して現れる¹⁰。まるで何か共通のテーマについて、模索しているかのようだ。そこで、それらに関連付けて比較検討することで、エリオットが、現代詩人としてデビューする直前に抱いていた詩的世界について、その特徴を垣間見ることにしたい。*Inventions* 本編に収録された37篇の詩について1つずつ順に考察していくのが、手堅い方法の1つだとは思う。だがそれは膨大な紙面を要することになるので、別の機会に譲ることにする。本論では、*Inventions* の詩的世界を集約していると思われる3篇の詩を中心に論じてみる。まず“*The Little Passion: From 'An Agony in the Garret'*” (57-58)を出発点とする。他の詩との比較を試みながら、次に“*Oh little voices of the throats of men*” (75-76)、最後に“*Hidden under the heron's wing*” (82)¹¹に論を進め、相互に比較してみる。そしてこれらの詩に共通する特徴として、語り手がいる場所と、彼が語る時間帯に着目してみる。具体的には、彼の部屋で迎える夜明けについてである。これは *Prufrock* には見られない設定であり¹²、*Inventions* の特徴の1つを捉えることができると思われるからだ。

2

“*The Little Passion: From 'An Agony in the Garret'*” (57-58)は、*Inventions* のなかでは、設定がユニークな詩の1つである。他の未発表詩では、語り手が自分の印象や体験を語る例が

多く見られる。しかし“*The Little Passion*”では異なり、ある男の言動を語り手が思い出している、という設定になっている。具体的に見てみよう。

夏の夜のことである。あの時のような「息苦しい8月の夜」(those stifling August nights)になると、語り手はあの男のことを思い出す。男は夜の街をよく歩いていた(I know he used to walk the streets)。何本もの線状に繋がった街の灯かり(the lines of lights)を辿って行った。ある時は灯かりを避け、「暗い隠れ家へと飛び込んだ」(diving into dark retreats)。夜の灯かりと闇の中を歩いていたのだ。そしてどこをどう歩こうが、どうしても“one inevitable cross”に来てしまう。表面上は十字路だが、文脈上は十字架の意味も重ねてある。そこでは「我々の魂がピンで刺され、血を流している」(our souls are pinned, and bleed)。キリストの受難のイメージと重ね、魂の苦悩を表わす。内面の十字架である。

この男がよく言っていた考えの中に、特に語り手が興味を覚えていることがある(Of those ideas in his head / Which found me always interested)。決して十分に理解していた訳ではないのだが(Though they were seldom well digested)、頭から離れないようだ。男は「何時間もいろいろな街」(those hours of streets and streets)を歩いた。街は車輪のように、彼の周りをぐるぐると回っていた(spun around him like a wheel)。出口のない堂々巡り。その後で彼が言った言葉、「まるで長い間死んでいたような気がする」(“I feel / As if I’d been a long time dead”)。この言葉が語り手の頭から、今でも離れない。

最終連の設定も興味深い。酒場でこの男と飲んでいた時のことを思い出す。上述の回想は、この酒場で男から聞かされたものと思われる。その時に男の顔に浮かんだ表情が、今でも忘れられない。男は「絶望的なタバコをひねりながら、酒場のカウンターから身を乗り出した」(he leaned across the bar / Twisting a hopeless cigarette)。この表現には、あの世に行くという熟語(cross the bar)の意味も重ねてある(Ricks 216)。男の「やつれた顔に、ある笑み」(on his withered face / A smile)が浮かんでいるのに語り手は気づく。その笑みをどうしても忘れることができないでいる(I cannot forget)。その笑みには、「疲れ果て、誰にも気づかれないままの恥」(A washed-out, unperceived disgrace)が現れていた。暗示的な終わり方だ。

魂の救済を求めて、夜の街をさ迷う男。しかし彼の心は救われず、絶望的な笑みを浮かべる。男がいつも行き着く先には、どうやら魂を救済できる方法が隠されているらしい。しかしそのためには、何らかの受難を伴う行動が必要らしい。血がにじむような苦痛を伴う受難が。語り手は、男の考えを消化できていないと言う。それでも、これほどまでに関心を示すのは、語り手自身が抱える問題とも何か関わりがあるためだと思われる。あるいは、ある男の話しという設定にしながらも、実は語り手自身のことを語っている、とも考えられる。なおタイトルの“*The Little Passion*”には、「キリストの受難」という意味が重ねてある。自己の魂さえ救済できない男。彼の切実だがちっぽけな苦悩は、“Little”と形容してある。

この詩で回想される男は、夜の迷路に入ってしまった、途方に暮れる。しかし、何らかの解決

の糸口を見つけ出そうと、もがき苦しんでいる¹³。疑問や不満を抱きながらも、単に傍観している時の語り手とは対照的だ。例えば、“Mandarins” 2 (20)では、「2人の女性」が「窓辺に座ってお茶を飲みながら」、海に沈む「夕焼け」を眺めて談笑している。語り手は彼女たちの仕草と服装をスケッチするだけで、内面には触れない。語り手自身の感情や意見も殆ど表わさない。“Goldfish (Essence of Summer Magazines)” I (26)では、夏の「暑いヴェランダ」で「ワルツ」を踊る人々を見ている。語り手はその様子を、余り好ましく思っていない(August, with all its faults!)。目的もなく習慣として踊っているだけの様子は、語り手には「耐え難い」(intolerable)。かといって彼にはどうすることもできず、ただ眺めて批判するだけだ。同じ詩の第Ⅲ部(28)でも同様に、「蒸し暑い午後」に「お茶」を飲む優雅な「ヴェランダでの習慣」(Verandah customs)に疑問を抱く。しかし冷ややかに傍観するだけで、何の答えも見出そうとはしない。また、「悲しい風景」という意味の“Paysage Triste” (52)では、偶然に劇場で見かけた少女のことを観察し、推測する。“Afternoon” (53)では、「大英博物館」に集まる女性たちを観察する。“In the Department Store” (56)では、店員の様子を観察し、勝手に彼女の内面を推測する。“The smoke that gathers blue and sinks” (70)は、酒場に集う客たちの「気だるい」様子を眺めている。このように観察やスケッチだけで終わる詩とは異なり、“The Little Passion”では、ある人物の魂の苦悩を描く。しかもこの男は、何らかの救済を求めている点も特徴だ。

“The Little Passion”では、副題に“From ‘An Agony in the Garret’”と記されているのみで、詩のなかで屋根裏部屋を指す表現はない。しかしこの副題¹⁴を基に考えると、次のようなことが言えるのではないだろうか。ある夏の夜に、語り手は自分の屋根裏部屋から外の街を眺め、ある男の魂の苦悩について思い返しているのだと。

この詩以外にも3篇の詩に、屋根裏部屋が出てくる。“Interlude in London” (16)では、語り手は春の訪れに「無関心」(Indifferent)のまま、部屋の中で「冬眠している」(hibernate)。そんな彼の「屋根裏部屋の窓辺」(garret windows)には、「壊れたフルート」(broken flutes)が置かれている。無題詩“He said: this universe is very clever” (71)では、「彼らは屋根裏部屋にいる彼を十字架にかけなかった」(They did not crucify him in an attic)と、ある男が言う。このhimが誰なのかは触れられていない。しかし“crucify”は、内容的には、“The Little Passion”(小さな受難)と関連している。そして、ある男の魂の苦悩(one inevitable cross)について、屋根裏部屋で回想している語り手とも繋がってくる。別の無題詩“Inside the gloom” (72-73)の語り手は、「屋根裏部屋の暗がり」(the gloom / Of a garret room)の中で、星座を観察している。しかも“‘The Little Passion’の時と同じく8月の夜に。

これ以外の詩でも、語り手の部屋についてある程度知ることができる。例えば、“Easter: Sensations of April” (23-24)では、自分の部屋から、「路地向かいに住む黒人の少女」の部屋を見ている。少女は路地向かいのアパートの「3階」に住んでおり、その部屋が見えるということは、語り手の部屋も3階あたりだと想像される。この少女が、「1本の赤いゼラニウム」の花

を教会から持ち帰ったのを見ている。その「香り」が、彼の部屋の「干からびたゼラニウム」(geraniums / Withered and dry)を思い出させる。彼の部屋は、世間との交わりがなく、ひんやりとしている(The cool secluded room)。室内は小奇麗に掃除され片付いている(Swept and set in order)。彼の部屋での暮らしぶりが推測できる描写だ。“Goldfish” IV (29)では、語り手の机の中を見ることができる。「10月」に自分の部屋の後片付けをしている時、「机の引き出し」の中から、忘れ去っていた品々を見つける。「古い手紙」、「プログラム」、「未払い請求書」、「写真」、「テニスシューズ」、「ひも」、「絵葉書」、そして以前書いた詩。すべてという訳ではないが、未発表詩の語り手は室内にいて考察したり、窓の外の世界を観察することが多い。夜になると、街に出て歩く。そして自分の部屋に戻り、夜明けを迎える。“The Little Passion”の副題にある屋根裏部屋とは、そのような語り手が住む部屋のことを指していると思われる。

3

このような部屋にいる語り手を描いた詩の1つに、“Oh little voices of the throats of men” (75-76)がある。室内で語り手は、ある人物に自分のことを打ち明ける。語り手は「弁証法的な方法で、世界を探求してきた」(I have searched the world through dialectic ways)。*Inventions*中の語り手(あるいは詩人)の多くに共通して当てはまる思考法である。「眠れぬ夜と無気力な昼」(restless nights and torpid days)に疑問を抱いてきた。「あらゆる脇道」(every by-way)を辿り、そして「いつもと同じ耐え難く終わりのない迷路」(the same unvaried / Intolerable interminable maze)を見つけるだけだった。“The Little Passion”で夜の街を歩く男とも重なる。迷路に迷い込んで途方に暮れてはいるものの、解決の糸口を求めて前進を試みている。たんに疑問や不満を抱きながら、傍観している語り手とは異なる。“Oh little voices . . .”の語り手は、他の語り手を代弁するかのように、自分の胸の内を告白する。聞き手役の男性は、1つ1つの問いに答え、助言を与える。最後にこの男性は、大切なのは「今」という現在の時間と、「ここ」という現実の場所だけなのだと励ます(No other time but now, no other place than here)。現実から目を逸らさずに、今ここにある瞬間を大切に生きよ、という肯定的なアドバイスだ。語り手は安心したかのように、そのまま椅子に座って眠ってしまう。だがこの詩は、ここで終わっていない。

夜明けを迎えると、詩の展開が変わる。晩春の頃、「ライラックの花が、朝の空気に吹かれて漂っていた」。一見さわやかな朝を迎えたかと思わせる書き方だ。語り手は昨夜の助言に満足したかのように、まだ眠っている。それをさらに別の語り手が見ている。“Suppressed Complex” (54)では、室内で眠っている女性を、「影」である語り手(I was a shadow)が観察していた。それと似た視点である。話しを戻す。語り手はまだ「ショール」にくるまって眠っている。夜明けを迎えた部屋の床では、まるでヘビのような影がまだ「這っていた」(the shadows crawled and crept)。“Prufrock’s Pervigilium”¹⁵ (43-44)の闇の描写とも類似する。影は、眠っ

ている彼の「肩」や「ひざ」の辺りを這い、髪の毛の上で一休みする(They crawled about his shoulders and his knees; / They rested for a moment on his hair)。そしてついに朝が来て、「影をねぐらへと追いたてた」(the morning drove them to their lair)。夜が明ける間際まで、彼の周りには夜の影が付きまとう。昨夜の助言で安心して眠ったかに見える語り手だが、依然として彼の心の中に残る疑問と不安を表わすような影である。助言を求めながらも、完全には受け入れられない不安感がある(同じようなモチーフは、“Goldfish” IV [29-30]の挿入詩にも見られる)。ようやく夜の影が消える。そして夜明けの風が吹くのだが、さわやかな風ではない。少し湿って、どんよりとした風(a little damp dead breeze)が微かに起こる。不気味な風は、「彼が眠っている間、窓辺でカタカタと音を立てた」。風は、他の家々の「煙突」や「雨戸」や「階段」でも吹いている。そして街で生活している「人間の声」(human voices)を、彼の部屋まで伝えるのである。この声が、詩の冒頭部にある“little voices”である。それは、笑い声か泣き声なのか分からない声だ(You had not known whether they laughed or wept)。夜が明けても消えない不安と懐疑心。それが、風の運ぶ音にも現れている。なお夜の室内で助言を与えてくれた相手というのは、語り手自身が作り出した架空の人物だと考えられる。すわなち自問自答。また、夜明けに眠っている語り手を見ている人物も、自己を客観視するもう1人の語り手自身であると言える。

4

“Hidden under the heron’s wing” (82)は無題の小品である。題名の付け方によっては、詩の意図が変わる可能性も残っている。状況設定が明示されておらず、一見つかみ所のない表現が目立つ。しかし、自室で夜明けを迎える語り手が語っているのだと考えると、意味が繋がってくる。

「夜明け」(daybreak)を告げる鳥の声が聞こえる。それと同時に、「夕方の星の囁き」(Evening whisper of stars)も聞こえて来る。夜明け前にもかかわらず、語り手は夕闇を感じている。鳥の声は、夜を告げる星のささやきになる。夜明けが近づいても、闇から逃れられない不安。夜明けを待ち望みながらも、恐れている。“Oh my beloved what do you bring”と、愛しい人に問いかけ、彼女が夜明けをもたらししてくれるのを待ち望む。しかし希望の光であるはずの彼女は、夕闇に包まれてしまい、夜明けをもたらせてくれそうにない。彼女は「夕暮れの足」(evening feet)で歩く。辺りは「夕霧」(the evening mist)に包まれ、夜明けには程遠い。彼女は「はかない両腕」(fragile arms)で、霧を掻き分けて「歩いている」が、行く手は遮られている。夜明けに迫りくる夕闇の不安があるために、このようなあいまいな表現となって現れている。

最後に語り手は自分のことを、部屋の床に散らばる「壊れたビン」の破片(a bottle’s broken glass)に喩える。壊れて断片となった自我のことだ。“Second Caprice in North Cambridge” (15)で語り手は、「都市の残骸」(the débris of a city)を観察しているが、まさにここでは語り手そ

のものが、都市の残骸のような存在として描かれている。部屋の中で存在感のないまま床に横たわる。断片的な自己の姿は、別の詩では、古新聞を切り貼りした寄せ集め(I am put together with a pot and scissors / Out of old clippings)と喩えられている (71)。このように崩壊した自我は、断片的に散らばるビンの破片に過ぎない。まるで、ゴミのように掃き捨てられてしまう存在だ。彼は自分の部屋で夜明けの訪れを待ち望んでいる。夜明けが近づき、次第に闇が薄らいで行く。本来なら、そのまま夜の闇は消えて、朝を迎えられるはずである。しかし語り手にとって、その薄明かりは夜明けではなく、夕暮れを予感させてしまうのだ。

夜明けを待ち望みながらも、夜の不安が重くのしかかる。夜の闇には光が差さず、出口もなく閉ざされたままである。このような不安は、“Introspection”(60)では、精神の奥底で、自己の尻尾を呑み込む「ヘビ」として表現されている。前述したように“Prufrock’s Pervigilium”(43-44)や“*Oh little voices. . .*”(75-76)で、このヘビは闇の恐怖となって襲いかかり、語り手は不安に怯えたまま夜明けを迎える。なお、“Suppressed Complex”(54)の時間設定も、夜から明け方にかけてであるが、そこに夜明けの不安はない。悪夢に苦しむ女性の寝顔を見つめて、「影」の語り手は心配している。だが夜が明けると、彼は「喜んで」(joyously)窓から出て行く。朝になって目覚めれば、彼女は悪夢から解放されるからだ。しかし、他者を観察するのでなく、自分自身あるいは自己の分身が夜明けを迎える時には、状況が異なる。他人事のように、冷静ではいられなくなる。夜は明けきらないまま、再び夜へと続く夕暮れとなってしまうのだ。“*Hidden under the heron’s wing*”は、この夜明けに迫る夕闇を象徴的に描いている。このような語り手の不安、ひいてはエリオットの不安が、夜明けの闇となって現われ、*Inventions*の世界を覆っているのである。

注

- 1 このうち次の4篇は、すでに1988年に出版された *The Letters of T. S. Eliot*, Vol. 1 (以後 *Letters 1*) に収録されている。“*Oh little voices of the throats of men,*” “*The Love Song of St. Sebastian*”(pp. 45-46); “*Afternoon,*” “*Suppressed Complex*”(pp. 88-89).
- 2 本編に収録された37篇の内29篇が、ペンまたは鉛筆で書いてあり、残りの8篇はタイプライターで打ってある。エリオットがタイプライターを購入したのは1913年か1914年(Gordon 23)なので、それ以降にタイプ打ちした原稿と思われる。
- 3 編集者の Christopher Ricks は *Inventions* の pp. 97-99 に、エリオット自筆の“*First Caprice in North Cambridge*”と“*Interlude in London*”の原稿をそのまま複写して掲載している。それを見ると、スペルと句読点がかなり読みにくく、さらに修正個所の判断がいかに難しいかが分かる。
- 4 未発表詩を書いたのと同じ1909年から1917年の間に、エリオットは *Prufrock* 詩全12篇も書いており、その内7篇の草稿は、創作ノートに挿入されている。つまり、エリオットが *Prufrock* に含めなかった詩が、未発表のまま残された訳だ。
- 5 例えば次のような3点。(1) Marianne Thörmahlen, *The Waste Land: A Fragmentary Wholeness* (1978), (2) Albert Gelpi, *A Coherent Splendor: The American Poetic Renaissance, 1910-1950* (1987), (3) Manju Jain,

T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years (1992).

- 6 ただし引用符を付けていないだけで、実際にはエリオットの詩句を直接用いている場合もある。特に Jain にそれが顕著。
- 7 筆者が調べたところでは、1997年までに日本で2点、英米で11点の書評が出ているのみである。その中で例えば Louis Menand は、Ricks の膨大で詳細な注の付け方について、疑問を抱いている。*The New York Review of Books* (15 May 1997): 4.
- 8 このタイトルは、創作ノートの表紙の見返しにエリオットが一度手書きし、横線を引いて削除したものである。Ricks はこの仮題を採用し、その複写を *Inventions* の最初のページに載せている。なおタイトル中の *invention* とは、音楽用語のインベンションのことで、幻想的な小即興曲を意味する。それに加えて、“as mad as a March hare”(交尾期の3月の野ウサギのように、狂気じみた)というイディオムが重ねてある(Ricks 6-8)。したがって *Inventions of the March Hare* とは、*Inventions* 中の“Caprice”(気まぐれ、奇想曲)と、*Prufrock* 中の“Rhapsody”(狂想曲)とを組み合わせたような意味になる。
- 9 *The Waste Land* の草稿と共に、エリオットがこの創作ノートを贈った2年後に、Quinn は亡くなる。それ以後創作ノートの所在は分からなくなってしまう。ニューヨーク公立図書館が所蔵を発表したのは、エリオットの死後3年経った1968年だった。その間の経緯については、James Torrens, S. J., “The Hidden Years of *The Waste Land Manuscripts*” (1989)に詳しい。それによると、Quinn が残した多くの資料に紛れたまま、彼の妹から姪の手に渡り、保管されていた。そしてその姪の夫が、後にエリオットの草稿を発見することになる。
- 10 その多くは *Prufrock* 中の詩にも頻出しており、相互の比較は興味深い課題になり得る。
- 11 *Inventions* 中の詩からの引用はすべて、Ricks 編集の1996年版テキストに拠る。なお、繁雑さを避けるため、必要に応じてタイトルの後に引用ページのみを記すことにする。また、無題の詩については、Ricks の例に倣い、詩の第1行をタイトル代わりに記す。
- 12 *Prufrock* で、夕暮れと闇は頻出するが、夜明けを描いた詩はない。朝の街を描いた“Preludes” IIIと、朝食時を描いた“Morning at the Window”があるのみである。
- 13 本論で触れていない詩で、同様に内面の苦悩を描いた詩としては、次のようなものがある。公園を歩いていた時に、彼女の手を握ったことについて後悔し、自問自答する詩、“Entretien dans un parc”(公園での会話)(48-49)。夜の炎に向かって飛ぶ蛾を眺め、炎に身を焦がし罪を贖う殉教者に喩えた宗教的な詩、“The Burnt Dancer”(62-63)。肉体と魂との葛藤を抽象的に描いた詩、“First Debate between the Body and Soul”(64-65)。愛の独占欲が、自虐的な行動をとらせるという、倒錯した愛の歌“The Love Song of St. Sebastian”(78-79)。自分の思考と感情について自問自答し、自殺の場面を想像する詩、“Do I know how I feel? Do I know what I think?”(80)。魂の死を象徴的に描いた“In silent corridors of death”(93)。
- 14 この副題にある“An Agony in the Garret”は、エリオットが構想を抱いていた長篇詩を指す、という仮説もある(Mayer 1, 68-69)。
- 15 *pervigilium* という語は OED に記載されていないが、夕暮れ、夜警を指す(Ricks 177)。

引用文献

- Eliot, T. S. *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917*. Ed. Christopher Ricks. London: Faber and Faber, 1996.
- . *The Letters of T. S. Eliot*. Vol. 1 (1898-1922). Ed. Valerie Eliot. London: Faber and Faber, 1988.
- Gelpi, Albert. *A Coherent Splendor: The American Poetic Renaissance, 1910-1950*. Cambridge: Cambridge UP, 1987. 91-165.
- Gordon, Lyndall. *Eliot's Early Years*. Oxford: Oxford UP, 1977.
- Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Mayer, John T. *T. S. Eliot's Silent Voices*. New York: Oxford UP, 1989.

- . "The Waste Land and Eliot's Poetry Notebook." *T. S. Eliot: The Modernist in History*. Ed. Ronald Bush. Cambridge: Cambridge UP, 1991. 67-90.
- Menand, Louis. Rev. of *Inventions of the March Hare*. *The New York Review of Books* (15 May 1997): 1-9. Online. Internet. 30 Jan 1998. Available <http://www.nybooks.com/nyrev/>
- Ricks, Christopher, ed. *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917 by T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1996.
- Thörmahlen, Marianne. *The Waste Land: A Fragmentary Wholeness*. Lund, Sweden: CWK Gleerup, 1978.
- Torrens, James S. J. "The Hidden Years of *The Waste Land* Manuscript." *Santa Clara Review* 76 (1989): 36-42. *Critical Essays on T. S. Eliot's The Waste Land*. Eds. Lois A. Cuddy and David H. Hirsch. Boston: G. K. Hall, 1991. 60-65.

(なかむら あつし 本学人文学部助教授 アメリカ文学専攻)